

# フィンランドの幼児教育における音楽教育の 意義と実践

— ナショナル・カリキュラムと「音楽プレイスクール」をめぐって —

永岡 都

Aims and Practices of Music Education in Early Childhood Education and Care (ECEC) and Pre-primary Education in Finland: Their National Curriculums and the System of the Music Playschool

Miyako Nagaoka

## Abstract

This paper provides information on the music education system in early childhood education and care (ECEC) and pre-primary education in Finland. The researcher visited eight educational institutions in Helsinki and Espoo in 2014 and 2015, observed music classes of nursery schools and elementary schools, attended seminars at Sibelius Academy and University of Helsinki, interviewed professional educators, studied the curriculums of ECEC and pre-primary education, and analyzed the characteristics of these programs as follows.

The objectives of education and learning in the curriculums of ECEC and pre-primary education are that children should be educated to become responsible members of the community, and both curriculums consider art, culture, and aesthetics in general, including musical experience and practice as essential. There are two aims: one is to give children means of self-expression through different forms of arts, and the other is to guide them to the entrance of the world of aesthetic and cultural values.

The music playschool, which is a music education program for 0-6 year old children, plays a significant role as one among the educational and care services for infants in Finland. For instance, the city of Espoo has a system whereby music schools send professional music teachers to nursery schools. This is suggestive as an ideal example of music educators working within the public education system.

The classes in the music playschools are carried out according to a systematic curriculum based on a theory of development of musical ability in children. The music playschool teachers, therefore, need to be very well informed in child development theories and psychology, and need to be creative in singing, playing instruments and in improvising.

*Key words:* music education (音楽教育), Finland (フィンランド), Early Childhood Education and Care (ECEC) (初期幼児教育および保育), pre-primary education (就学前教育), music playschool (音楽プレイスクール), national curriculum (ナショナル・カリキュラム)

## 1. はじめに

近年、先進各国において幼児教育に対する政策的重要性が高まり、保育制度の改革や就学前教育の義務化、教員養成制度の見直しが積極的に進められている。日本においても2015年4月から「子ども

も・子育て支援新制度」が施行され、長く続いてきた幼稚園と保育所の理念の対立を超えて、幼児教育のコンテンツを再考しようとする動きが活発になっている。

しかし、音楽教育に関しては一般的な関心が高いとは言えず、音楽が公教育の重要なコンテンツであるという認識も次第に後退しているように思われる<sup>1</sup>。その一方で、脳科学の分野では音楽体験が子どもの心身の発達に積極的な役割を担うとする研究成果も出ており、「生涯にわたる人格形成の基礎を培う<sup>2</sup>」幼児教育において、どのような音楽経験を積むことが望ましいのか、真剣に議論する時期に来ていると言えよう。とりわけ、音楽と音楽教育に携わる者が公教育の出発点にどのように関わることができるのか、あるいは関わるべきなのか、社会への関与も含めて考えなければならない。

このような問題意識を踏まえて、筆者は現在、諸外国の幼児教育制度とその中での音楽教育の位置づけや実践について共同研究者<sup>3</sup>と共に調査・研究を進めている。本稿はその一環として、フィンランドの幼児教育に目を向け、2014年9月と2015年3月の2度にわたる現地視察(表1)の資料をもとに、同国の幼児音楽教育の実践の一端とそれを支える機構について紹介し、幼児教育における音楽活動の諸条件について考察するものである。

表1 フィンランド視察先一覧

2014. 9. 21	1) エスポー市, Nuottakunnan päiväkoti (ヌオッタクンタ保育園): 3歳児, 4歳児, 5歳児の音楽指導を見学。担当教師 Inka Hämeenaho-Vaara と懇談。 2) ヘルシンキ市, Viikin normaalikoulun ala-aste (ヘルシンキ大学教員養成課程附属ヴィーッキ小学校): 実習生による4年生の授業を見学。担当教員 Sari Muhonen と懇談。
2014. 9. 22	1) ヘルシンキ市, Itä-Helsingin musiikkikoulu/Porolahden IHMU-piste (東ヘルシンキ音楽学校併設小学校): 3年生の音楽授業, 1, 2, 4年生の器楽レッスンを見学。校長, 授業担当者と懇談。 2) ヘルシンキ市, Musiikkileikkikoulu (音楽プレイスクール): 3歳児, 4歳児, 5歳児の音楽指導を見学。担当教師 Silja Mustonen と懇談。
2014. 9. 23	1) ヘルシンキ市, Sibelius Academy (シベリウス音楽院, ヘルシンキ・ミュージック・センター): ポピュラー音楽, フィンランド民俗音楽, 音楽と動きのワークショップ, 子どもの音楽の各授業を見学, 各授業担当者と懇談。 2) Heidi Westerlund (シベリウス音楽院教授) とナショナル・カリキュラム, 教員養成制度について懇談。
2015. 3. 9	1) エスポー市, Espoon musiikkiopisto (エスポー音楽学校): 4歳児, 3歳児, 乳幼児の音楽プレイスクールを見学。担当教師 Salla Hämeenaho と懇談。 2) Paula Jordan (エスポー音楽学校長) と懇談。
2015. 3. 10	1) エスポー市, Nuottakunnan päiväkoti (ヌオッタクンタ保育園): 2歳児, 5歳児, 6歳児の音楽指導を見学。担当教師 Inka Hämeenaho-Vaara, 副園長と懇談。 2) ヘルシンキ市, Helsinki Metropolia University of Applied Sciences (ヘルシンキメトロポリア応用科学大学) 訪問, Sanna Vuolteenaho (音楽教育学部) と懇談。
2015. 3. 11	1) ヘルシンキ市, Viikin normaalikoulun ala-aste (ヘルシンキ大学教員養成課程附属ヴィーッキ小学校): 1年生の授業を見学, 担当教師 Anja Huurinainen-Kosunen と懇談。 4年生の授業を見学。担当教員 Sari Muhonen と懇談。 2) ヘルシンキ市, University of Helsinki (ヘルシンキ大学教員養成学部): ゼミ見学。Inkeri Ruokonen (ヘルシンキ大学教授), Anu Sepp (エストニア音楽・演劇大学) と懇談。

同行者: 2014. 尾見敦子 (川村学園女子大学教授)

2015. 尾見敦子, 坂井康子 (甲南女子大学教授), 川村バルムネン博子 (フィンランド語通訳)

まず初めに、フィンランドの幼児教育・保育制度を概観した後、その制度を支える2つのナショナル・カリキュラム、『幼児教育・保育のためのナショナル・カリキュラム指針』（2003年）と『就学前教育のためのナショナル・コア・カリキュラム』（2010年）の内容を検討し、フィンランドの幼児教育の中核となるコンテンツと其中での音楽の位置づけを明らかにする。

次に、実際に教育を推進する地方機関（現場）のシステムについて考察する。フィンランドでは、地方自治体に教育の財源と人材確保の大きな権限が与えられている。各自治体はナショナル・カリキュラムの枠組みを守りつつ、その地方での教育カリキュラムに決定権をもち、各学校にどれだけの自主性を委ねるかを決定する。つまり地方ごとに独自の教育プログラムや教育サービスを提供する余地がある。実際に現地に行き判ったのは、フィンランドには学校制度（公教育）とは別に伝統的な「音楽学校」の制度があり、幼児から成人まで音楽を学ぶシステムがあること、そして、その「音楽学校」のプログラムの一つに0歳～6歳を対象とする「音楽プレイスクール Musiikkileikkikoulu」<sup>4</sup>があり、それが幼児たちの教育・保育サービスの一つとして役割を果たしていることだった。さらには、ヘルシンキ市に隣接するエスポー市では、「音楽プレイスクール」の教師が保育園に派遣されるシステムがあり、現在22の保育園がこれを利用していることも判った。この派遣制度はいろいろな点でユニークであり、示唆的である。専門教育と公教育が連携するモデルケースとして、経緯と背景を明らかにし、専門教育の社会的貢献のあり方について言及する。

最終章では、「音楽プレイスクール」の授業を音楽的内容から分析する。「音楽プレイスクール」の授業には構成や内容にいくつか共通する特徴があり、子どもの身体的・情緒的・音楽的発達理論に裏づけされた体系的なカリキュラムに基づいているのを見て取れる。エスポー音楽学校の「音楽プレイスクール」、派遣教師によるエスポー市の公立保育園での音楽活動、ヘルシンキ市の「音楽プレイスクール」の、3つの異なる場所での実践を比較分析し、「音楽プレイスクール」の教授方法とストラテジーについて考察する。

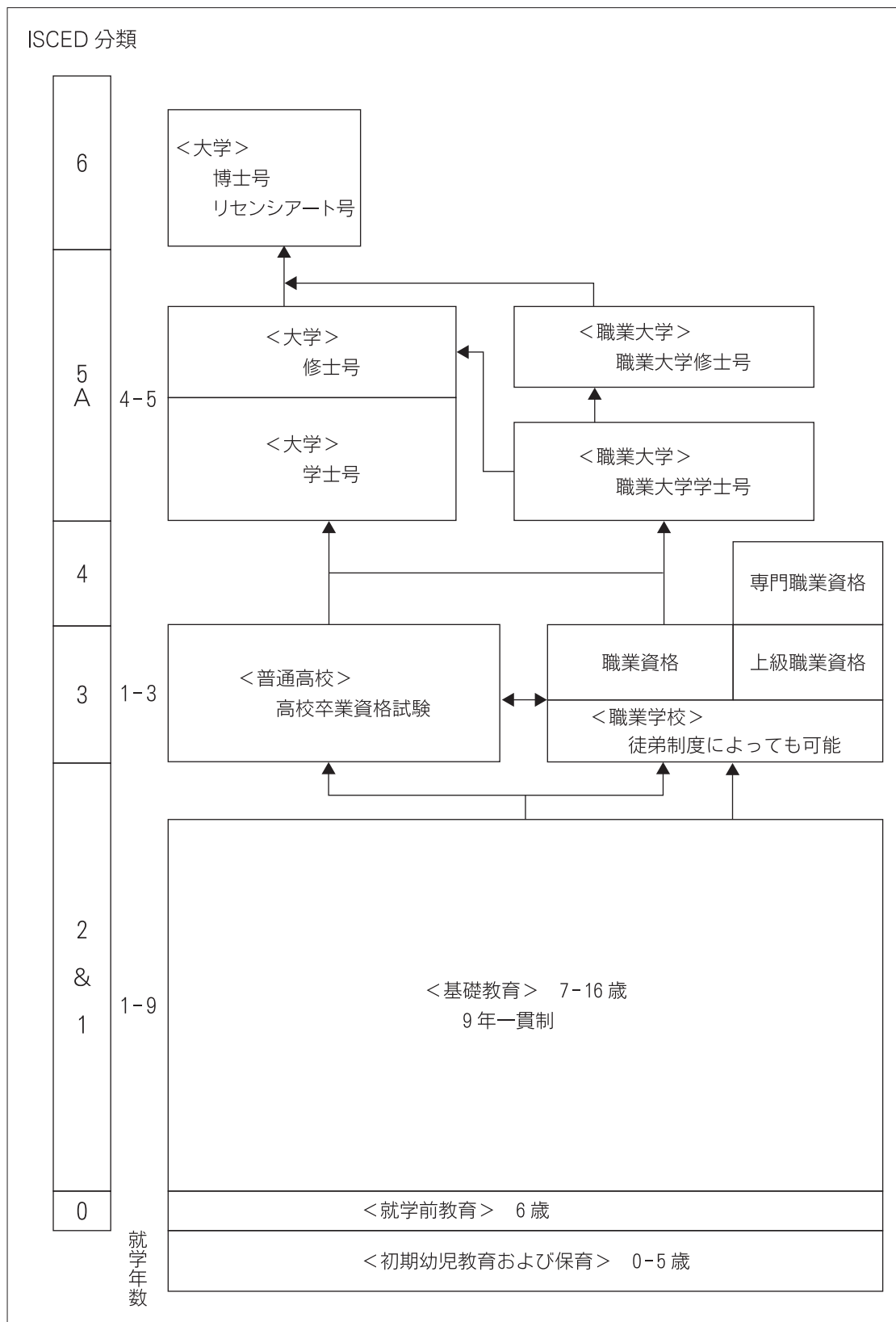
## 2. 幼児教育に関する2つのナショナル・カリキュラムと音楽の位置づけ

### 2.1 フィンランドの幼児教育・保育制度について

国土の4分の1が北極圏に属するフィンランドは、総面積33万8千平方キロメートル、日本とさほど変わらないが、人口は約540万人（2014年現在）と日本の20分の1以下である。決して大国とは言えないこの国が「教育大国」としてにわかに脚光を浴びるようになったのは、2000年と2003年の国際学力調査（PISA）でトップの成績を収めたことによる。同時期にノキアなどIT関連の企業が好調だったこともあり、フィンランドの教育はイノベーションの時代にふさわしい教育モデルとして注目され、世界中から取材や視察が訪れるようになった。フィンランド政府も国のアピールポイントとして「教育大国」のイメージを大切にしており、ナショナル・カリキュラムの英訳をweb上で公開するなど情報発信に努めている<sup>5</sup>。

フィンランドの幼児教育に関して筆者がまず関心をもったのは、フィンランドが一足早く就学前教育の制度化に踏み切ったことと、幼児教育・保育のためのナショナル・カリキュラムに続いて、2010年に就学前教育のためのナショナル・カリキュラムを制定し、幼児期から基礎教育（小中学校教育）への円滑な移行を図っていることを知ったからである。ナショナル・カリキュラムは、フィンランドの教育文化省と国家教育委員会によって作成された国の教育の基本計画で、言わば日本の指導要領に

表2 フィンランドの教育制度



(National Board of Education, Eurydice, Finland. Description of Education system をもとに永岡が作成)

あたる。フィンランドでは、このナショナル・カリキュラムをベースとして、各地方自治体が地方のカリキュラムを作成し、さらにその枠組みの中で各学校がより詳細で具体的なカリキュラムを作成する三層構造になっている<sup>6</sup>。ナショナル・カリキュラムは、教育の内容と質を国の統一基準として保障するものである。したがって、フィンランドの幼児教育において音楽がどう位置づけられているか、公教育の中で音楽活動がどのようなコンテンツあるいは役割を担っているかを明らかにするには、ナショナル・カリキュラムの文言を検証することが第一歩となる。

フィンランドの基礎教育は、日本より1年遅く、7歳から開始される。0～5歳が「初期幼児教育および保育 Early Childhood Education and Care（略してECECと表記される）」の期間で、6歳が「就学前教育 Pre-primary school」の期間である。フィンランドは他の北歐諸国と比べて、自治体の保育所デイケア（保育園<sup>7</sup>）を利用する割合が低く、公的保育サービス（保育ママ）や在宅育児など、家庭で子育てをしている世帯も多い<sup>8</sup>。2000年代に入って、3～5歳児の保育園への就園率が急増<sup>9</sup>してきたが、国全体として幼児教育の充実と質の確保が長年の課題であった。6歳児教育を就学前教育として制度化し、ナショナル・カリキュラムでその内容と質の確保に取り組んだ背景には、子育て支援の多元化というフィンランド固有の事情が影響しているのかもしれない。

就学前教育は、全ての6歳児に権利があるが、参加は自由である。ただし、自治体には就学前教育を提供する義務があり、現在、小学校あるいは保育園で実施されている就学前教育には6歳児のほとんどが参加している。子どもたちは学習の基礎となるスキルや知識を身につけていく<sup>10</sup>が、この段階では遊びながら学ぶことが前提となっている。保育園で実施する場合は、大学で修士の資格を取得した幼児教諭（保育教諭）<sup>11</sup>が指導にあたり、具体的なカリキュラムも作成する。フィンランドの保育園では、保育士と幼児教諭が連携して仕事をしているが、その資格によって職分がはっきりと区別されている。保育士は職業大学<sup>12</sup>で准看護師の勉強をし、さらに保育の勉強をすると資格を得られるが、教育学を修めていないので「教育」にはタッチできない。（表2）

以上のように、フィンランドの0～6歳児の教育は、ECEC（初期幼児教育・保育）の期間と就学前教育の期間に分かれており、ナショナル・カリキュラムも2つに分かれている。次項ではまず、2つのナショナル・カリキュラムの全体構成を概観し、幼児教育の基本的な理念を明らかにする。

## 2.2 『幼児教育・保育のためのナショナル・カリキュラム指針』と『就学前教育のためのナショナル・コア・カリキュラム』

0～5歳を対象とする『幼児教育・保育のためのフィンランド・ナショナル・カリキュラム指針<sup>13</sup>』（以下、「幼・保ナショナル・カリキュラム」と略す）は、「1 ナショナル・カリキュラムの目的とポリシー」、「2 ECEC とは何か・ECECにおける価値・教育目的」、「3 ECECの実施」、「4 親の協力」、「5 特別支援」、「6 実施にあたっての配慮」、「7 地方のカリキュラム」の7項目から成り、就学前教育や基礎教育のためのナショナル・カリキュラムと共に、「子どもの福利、発達、学習を促進するための国の枠組みを形づくっている<sup>14</sup>」。このナショナル・カリキュラムを概観して感じることは、その教育の目的と性格についてかなりのスペースを割いていること、そして、その「実施」にあたって具体的に何をするか、子どもたちの日常の行動や思考だけでなく、将来の学びや人間としての成長を射程に収めながら、広範な領域から教育の内容と方法を体系化しようとする意思である。

例えば「3 ECECの実施」の細目「3.7 子どもの行動形式」では、子ども特有の行動と思考の

形式として「遊び」「運動」「探究」「様々な芸術形式による自己表現」の4つを挙げ、それぞれの指導にあたって、教師が「子どもにとって有意義な体験」「周囲の教師が取るべき行動」「(どのように)保育の環境(を準備すべきか)」の3つの観点から、包括的な保育・教育を展開しなければならないとする<sup>15</sup>。また「3.8 コンテンツの方向づけ」では、子どもたちが多面的かつ、統合的、包括的な世界観を築き上げるために、以下の6つの領域が不可欠であるとしている。

- ・数学的な方向づけ
- ・自然科学への方向づけ
- ・歴史・社会への方向づけ
- ・美的なものへの方向づけ
- ・倫理的な方向づけ
- ・宗教・哲学への方向づけ

これらの方向づけは、子どもたちが、自分を取り巻く広い世界の現象について試し、理解し、体験するためにどんな能力と方法を身につけていけばよいか、その出発点を示しているわけだが、それぞれの方向づけの中に「批判的思考」「創造性の表現」「イメージの実現」「感情の洗練」「意思的行動」の本質を見出しているのである。

教育の目的を説明し、教育のコンテンツを体系的、理念的に示すこの基本姿勢は、『就学前教育のためのナショナル・コア・カリキュラム<sup>16</sup> (以下、「就学前ナショナル・カリキュラム」と略す)』でも一貫している。このカリキュラムの第1章に掲げられた「教育と学習の全体目標」は、きわめて多岐にわたる一方、目標の核として、子どもたちを社会の一員として育てていくことが掲げられている。

- ・就学前教育の目標は、一方で個々の子どもたちの発達段階と学習能力に合わせて、他方で社会的なニーズによって、決定される。
- ・子どもたちのポジティブな自意識を高め、彼らの学習スキルを向上させること。子どもたちが基礎的なスキル、知識、能力を多様な学習分野から、彼らの年齢と能力に応じて受容すること。(それらを)遊びを通して学ぶこと。子どもたちは学びの中で仲間の大切さを理解する。彼らは、学びの楽しさと熱意を獲得し、信頼と創造性を伴って、新しい学びにチャレンジする。
- ・子どもたちは、何が正しくて何が間違っているか、それをどう反映するか、考えることを学ぶ。コミュニティの責任ある一員として行動することを求められる。共存のルールを実践し、そのルールに積極的に関与する。我々の社会の良きやり方を会得し、その重要性を日常生活の一部として理解する。自らをコントロールすること、そして毎日の状況にどのように合わせるかを学ぶ。平等を理解し、人々が多様であることを受け入れる。自らの年齢にふさわしい健康と健全を保つ。
- ・子どもたちの言語的・文化的アイデンティティと自己表現の力を強化すること。様々な芸術の形式、地方と国の文化、他国の文化に親しむこと。
- ・子どもたちが自然に親しみ、自分たちが独立した存在であるという考えや、自然と人工的環境の両方に責任をもつような意識を形成する。環境を観察し分析する方法を学び、環境の美しさと多様性を楽しみ、彼ら自身の行動の効果を意識するようにさせる<sup>17</sup>。(永岡訳)

就学前教育は「統合教育」を基本とする。統合教育は、一方で子どもたちの生活領域に関わると共に、もう一方で彼らの世界観を拡大し、構造化するコンテンツと関わるような「テーマ」で構成される。その目標は、子どもたちが生活するコミュニティにおいて協議され、共同体のメンバーに知らされる<sup>18</sup>。(永岡訳)

『幼・保ナショナル・カリキュラム』と『就学前ナショナル・カリキュラム』の2つを概観して実感することは、フィンランドにおいては、教育の目的と内容は常に社会的コンセンサスを得られるよう「説明されなければならない」ということだ。教育は「社会の基本的な価値の上に積み上げられる

もの」であり、それゆえ教育の目標は「コミュニティにおいて協議され、周知される」必要がある。フィンランドのナショナル・カリキュラムにおける教育のコンテンツは、社会がどのような成員を求めているかをまず明確に示し、それへと繋がるプロセスの一つとして教育の目的と範囲を決定している。教育の目標を明確にすること、それについての社会的合意を形成すること、そのための説明責任と協議を怠らないこと。この教育の社会的責任という理念は、ナショナル・カリキュラムだけでなく、現地フィンランドの教育関係者との対話の中でも強く印象づけられたことの一つである。

### 2.3 芸術体験・活動としての音楽

幼児教育に関する2つのナショナル・カリキュラムにおいて、音楽は単独に位置づけられてはおらず、「芸術体験」あるいは「芸術活動」の中に包含されている。では、カリキュラム全体の中で「芸術体験あるいは活動」はどのように位置づけられているのだろうか。

『幼・保ナショナル・カリキュラム』では、子ども特有の思考と行動形式の一つとして「遊び」「運動」「探究」と並んで、「様々な芸術形式による自己表現」を挙げ、それは子どもにとって次のような「有意義な体験」であるとする。

子どもは、ここで基礎的な芸術体験をするが、その環境がやがて、音楽、描画、ダンス、演劇、手工芸、文学といった幅広い芸術活動を育てることになる。芸術体験の強さや魅力が子どもを活気づけ、彼らの注意を繋ぎとめる。芸術活動とその体験が子どもを美的な世界へと誘うのだ。学ぶ喜び、芸術的なドラマ、フォルム、サウンド、色彩、感情、様々な感覚に基づく経験の結合。芸術は子どもたちに想像の世界を体験する機会を与える。この架空の世界ではあらゆるものが可能であり、真実なのである。

芸術はまた、子どもの学びと実践という点でも規則性を含んでいる。子どもたちは、一人あるいは集団で芸術活動やスキルや自己表現を楽しみ、芸術体験や活動を通して、個人としても、社会の一員としても成長していく。幼児期に培われた基礎的な芸術体験が、その後の芸術の好みや選択、文化的価値観の基礎を築く<sup>19</sup>。(永岡訳)

子どもの思考・行動形式の一つである「自己表現」が、単なる「自己表現」ではなく、「様々な芸術形式による自己表現」と捉えられていることに注目したい。「芸術の形式」は決して子どもの自由な表現を束縛するものではない。むしろ「学ぶ喜び」と「感覚的な経験を結合する」方法を教え、美的な世界や文化的価値観へ子どもを誘うものとして、ポジティブに捉えられている。それゆえ、「美的な方向づけ」が、ECECの中心的な6つの領域の一つと位置づけられるのである。

美的なものへの方向づけは、広く多面的である。それは、観ること、聴くこと、感じること、創ることだけでなく、想像力と直観力によっても広がっていく。この方向づけの目的とは、美しさ、調和、旋律、リズム、スタイル、興奮、喜び、そしてそれらのアンチテーゼも含めて、子どもに個人的な感覚と感情と体験を与えることである。子どもの価値観、姿勢、ものの見方はここから発展し始める。人間の発達と人間性の発展の双方にとって、この方向づけは重要な過程の一つである<sup>20</sup>。(永岡訳)

『就学前ナショナル・カリキュラム』においても、「芸術と文化」は、「言語と相互交流」「数学」「倫理学と宗教」「環境と自然の研究」「健康」「身体と運動の発達」「芸術と文化」の7領域のコア・コンテンツの一つとして意義づけられている。

就学前教育において、音楽およびその他の芸術的体験は、子どもの情緒的、実験的、認知的発達の重要な部分を形成している。子どもたちの創造性と想像力と自己表現は、絵画、音楽、手仕事、劇、ダンス、運動を通して発達する。子どもたちは、芸術を体験し、それを楽しみ、それについて議論する機会を与えられる。

遊びと探索的、実験的な芸術体験の援けを借りて、子どもたちは自分と自分を取り巻く世界の現象について知るようになる。子どもたちは芸術作品に魅了され、自分や他の人の作品を鑑賞するようになる。子どもたちの感性、知覚、空間感覚の発達を援ける。こうして、子どもたちの学びのプロセスは次第に深まっていき、日常生活のスキルと共に、思考と問題解決能力のスキルも学ぶことになる。

子どもたちはコミュニケーション・メディアに親しみ、それを実践的に使いこなす機会を与えられる。教師は、画像を吟味し、その意味論的内容と視覚表現について子どもたちと話し合う。子どもたちは音響世界とコミュニケーションにおける音楽効果について探求する。子どもたちは、自分の考えや感情を、言葉やドラマによって、すなわち声の調子や強調、表現、身振り、動きを通して表現するように促される。

子どもたちが自分たちの文化遺産と文化の多様性について理解するとともに、文化的アイデンティティを強化することをサポートする。子どもたちは、自然環境と人工的な環境と物質環境、それぞれの美的、文化的価値を味わい、大事にすることを教えられる。

子どもたちは様々なテーマのモジュールを結びつけて、自分を多様に表現するよう促される<sup>21</sup>。(永岡訳)

「音楽」を含む芸術体験は、子どもの「感情的、実践的、認知的発達の重要部分を形成する」だけでなく、芸術体験について話し合ったり、創ることによって「思考と問題解決のスキルを学び」、「自分たちの文化やその多様性について理解し」、「美的、文化的価値を尊重する」ことに繋がるものとされる。前項でも述べたように、フィンランドのナショナル・カリキュラムの根底には、子どもの現在にフォーカスするだけでなく、将来社会の一員として価値観を共有できる大人となることを到達目標として、そこから逆算して幼児期の学びの範囲を決めるという基本姿勢がある。フィンランドのECECにおいても基本は「子どもは遊びを通して学び」、「遊びは子どもにとって一つの行動形式というより、一つの姿勢 attitude である」<sup>22</sup>と解釈するが、日本のように「遊びを通して」保育することを強調するだけではない。美的な世界や文化的価値へのアプローチ、大人の文化へ子どもを誘うことは、教育の大きな使命の一つと見なされている。その中で「音楽」も思考 thinking や問題解決能力を深め、美的で文化的な価値に対するリスペクトを育てるものとして、しっかりと位置づけているのである。

以上、フィンランドの幼児教育に関する2つのナショナル・カリキュラムを検討し、公教育における音楽の位置づけを確認した。しかし、実際の教育・保育の現場ではどのような音楽実践が行われているのだろうか。次章では、エスポー市の「音楽プレイスクール」の事例を中心に、専門教育と公教育の連携、あるいは専門教育機関の社会的役割について考察する。

### 3. 「全ての子どもに全ての教育を」:

#### 音楽教育と現場を繋ぐ、エスポー市の「音楽プレイスクール」

##### 3.1 フィンランドの音楽教育

20世紀前半に作曲家シベリウスを輩出したフィンランドだが、音楽教育に関して突出した印象はない。中世以来、800年の長きにわたってスウェーデンに支配され、さらに1917年に独立するまで約1世紀間ロシアに占領されていたこの国の音楽文化は、基本的にヨーロッパの一部である。国民の大半が母語としているフィンランド語は、印欧語族とは異なる言語体系だが、ハンガリーのように母国語の民謡から民族の「音楽的母語」を抽出し、公的な音楽教育の基盤とする方向には進まなかった<sup>23</sup>。

2014年9月にフィンランドを初めて訪れた筆者は、ヘルシンキ市とエスポー市で保育園、小学校、「音楽プレイスクール」、シベリウス音楽院の教員養成課程など、様々な音楽教育の現場を視察したが、メソッドや教材がかなり自由であることに驚いた。ハンガリーと同じように「音楽小学校<sup>24</sup>」が存在



し、コダーイのハンドサインやリズム唱が公立の小学校で普通に用いられている。しかし、本格的にハンガリーのコダーイ・メソッドを取り入れているというわけでもなく、オルフやスズキ・メソッドも同じくらい普及している。また「音楽プレイスクール」や小学校では、子どもたちがフィンランドを代表する民族楽器カンテレ<sup>25</sup>を学習しているが、5弦を「ドレミファソ」に調弦していて、それが伝統的な調弦と整合するのか不明なところもあった。さらに、幼児教育や小学校の現場でのポップスサウンドの使用にも何ら制限がないようであった。声とアコースティックな響きに拘るハンガリーの音楽教育とは様相が異なり、フィンランドの音楽教育現場は、いろいろな意味で「自由」であった。

視察する中で、エスポー市の公立保育園で見学した3歳、4歳、5歳の音楽活動は、外部機関から派遣された教師が担当していて、非常に充実していた。何より驚いたのは、活動時間が長いことで、3歳児でも45分間全く中断することなく、歌やリズム遊びや簡単な楽器の操作など次々と活動の興味を変えながら、アクティブな授業を展開していた。授業の後、担当教師と懇談して、彼女が地元のエスポー音楽学校 Espoon musiikkiopisto (次項参照) から現場に派遣されていること、他の保育園にも音楽教師が派遣されていることを知った。

その翌日、ヘルシンキ市郊外で見学した「音楽プレイスクール Musiikkileikkikoulu」の授業も非常に興味深かった。これは、平日の夕方、住宅街の一角で行われている音楽教室で、3歳から6歳までの子どもたちが親に送り迎えをしてもらって通ってくる。4歳、5歳、6歳のクラスを見学したが、やはり60分も続く活動時間の中で、歌唱や運動遊びや器楽など様々な活動をこなしていく。いくつか授業を見ていくうちに、共通する構造があることや年齢ごとの発達を考慮したプログラムになっていることに気づき、「音楽プレイスクール」という制度そのものをもっと詳しく知りたいと思った。

そして、2015年3月にエスポー市を再訪し、関係者に取材をする中で、「音楽プレイスクール」が全国的な組織であることが判った。そして、エスポー音楽学校が市内の22の公立保育園に音楽教師を派遣し、同校の「音楽プレイスクール」と同じ授業を行っていることや、これがモデルケースとなって、他の芸術学校も教員を派遣し始めたことを知った。専門教育機関と公教育が連携する興味深い事例として、以下にその取組みの概要を記す<sup>26</sup>。

### 3.2 音楽学校

保育園への音楽教師派遣の母体となっている「音楽学校 Musiikkiopisto」は、表2の基礎教育や普通教育とは別の教育機関である。音楽学校自体はヨーロッパの伝統的な制度であるが、フィンランドにおいて現代的に整備されたのは1950年代である。14の音楽学校とシベリウス音楽院が連合を立ち上げ、それまでバラバラであった教員の資格やカリキュラムを統一した。1969年に音楽学校の条例が作られ、1998年に条例改正、その後2002年に音楽以外の芸術学校に関する法律も作られて、ダンスや美術の学校が音楽学校を追う形で整備されつつある。現在、音楽学校はフィンランド全土に約100校あり、フィンランド全体で15%、エスポー市では25%の子どもたちが音楽学校に通っている。

音楽学校のカリキュラムは、教育省が定めたカリキュラムの枠内で、学校独自のカリキュラムが作られる。エスポー音楽学校の場合、コースは、1) 器楽教育、2) 合奏とオーケストラ、3) 音楽理論・ソルフェージュ・音楽史、4) オプションル・コース (リトミック、作曲、音楽工学、合唱、ワークショップ、マスターコース) があり、オーケストラの全ての楽器が学べる他、民族楽器カンテレやポップス、ジャズも学ぶことができる。

音楽学校には、何歳で入学するとか何年で卒業するという決まりはないが、年齢別に大きく4つの階梯に分かれている。

- ・ 専門家になるための教育
- ・ 18歳以上: 2~4年間
- ・ 5~18歳: 基礎レベル (楽器ごとに教育)
- ・ 0~6歳: 音楽プレイスクール

楽器を学ぶ者はまず「基礎レベル」(6~9年間)から始める。基礎レベルの後に「コレッジ・レベル」(約3年間)、大学レベルの「ディプロマ」コースがあり、専門家を志す者はさらにその先の勉強を続けていく。

現在、エスポー音楽学校で器楽を学んでいる生徒は950名ということだったが、こうした公教育以外の教育システムが盛況であるのは、フィンランドには日本のような学校単位のクラブ活動がないことも関係しているようだ。学校のクラブの代わりに、地区や町単位のクラブがあり、子どもたちは放課後そこに通ってスポーツや芸術を学ぶ。サッカーやバスケットのクラブと同じ序列で、音楽学校や美術学校が存在している<sup>27</sup>。それゆえ、音楽学校の目的は、プロの音楽家を育てることだけでなく、音楽の愛好家を育てること、文化遺産を受け継ぎ、更新していくこと、社会に貢献することも重要な目的となっている。音楽学校では、子どもたちが音楽を学ぶことによって、自分の能力に対する自信を深め、自律心を高め、音楽実践の中で感情と脳の働きを活性化するとアピールしている。子どもたちに音楽を学ぶ場を与えることは、深い学びや思考が失われつつある現在の西欧社会へのチャレンジとさえ捉えている。

エスポー音楽学校での取材を通して強く印象づけられたことは、学校がその教育活動を「社会的な仕事」と強く意識し、対外的にアピールしていることだった。エスポー音楽学校の事業も、学校で音楽レッスンを行うだけでなく、病院や高齢者ケアセンターでの年間40回に及ぶコンサート、幼稚園や学校への教師の派遣、ショッピングセンターや会社、駅での音楽イベントの開催など、多岐にわたっている。

「経済を重視する現代社会では、美を教えることについてコンセンサスを得にくくなっている。その中で、音楽の役割を合理的にアピールすることは重要か。」という筆者の質問に対し、「世界的な不況の中で、フィンランドもイノベーションがないと立ち行かなくなっている。美術がGDPを上げるかという議論があったように、音楽もツールとしてその効果を証明する必要がある。5月の選挙に向けて芸術に関するPRをしている。」<sup>28</sup> という校長の答えが象徴的であった。

### 3.3 音楽プレイスクール

エスポー音楽学校の「音楽プレイスクール」は、0~6歳を対象とする幼児向けの音楽教育プログラムであるが、スクール制度そのものは全国的なもので、フィンランド全体で約5万人の子どもたちが通っている。

「音楽プレイスクール」は1958年、Sirikka Valkola-Laineによってヘルシンキで始まり、1960年代に同じような考え方をもつ教師たちが集まって組織を拡大し、1979年教員連合が設立された。授業を担当するのは、シベリウス音楽院やヘルシンキ職業大学などで教育を受けた専門家だが、スクールを運営する組織は、音楽学校、行政区、個人など様々である。

エスポー音楽学校が運営する「音楽プレイスクール」は、タピオラ地区<sup>29</sup>の文化センターの中に在り、平日の9時から15時まで開かれている。既述のように、フィンランドは保育園に通う子どもの割合が高くなく、在宅育児の子どもたちも多い。母親がパートタイムあるいは産休・育休を取っているなど、事情は様々であるが、そうした子どもたちにとって、音楽学校が平日の午前中に開く音楽プレイスクールは、家庭教育を補完する教育サービスとして重要な役割を果たしている。

エスポー音楽学校のモットーは「全ての子どもたちに全ての教育をすること。音楽的な経験を与えること<sup>30</sup>」である。幼児における音楽教育のエレメンツは「歌うこと」「リズムをとること」「動くこと・ダンスすること」「演奏すること」「即興すること」の5つである。それらの活動を、子どもにとって「喜び joy」であり、「易しいこと easyness」であるように心がけながら、何度も「繰り返す repetition」、深めていく。「易しいこと」「繰り返すこと」は、子どもたちがその活動を「喜び」とするために大切なことである。自分の能力や可能性を信じ、「できる」というポジティブな意識をもつことは、レベルに見合った活動をし、成功体験を積むことによって培われていく。「音楽によって子どもの内的なモチベーションを育てる」ことが、音楽教育の大きな目標なのである。

エスポー音楽学校長のパウラ氏は、「音楽への愛情を心の中に落とし込むのは、音楽プレイスクールしかない」と断言する。実は、保育園の現場に「音楽プレイスクール」の教師を派遣することは、音楽学校から働きかけたことであった。2007年にパイロット・プロジェクトとしていくつかの保育園で試行され、それが成功したので市当局が続行を決定したのである。現在は、22の公立保育園に教師が派遣されている。授業は音楽学校の「プレイスクール」と同じ内容で進められ、半年間で100ユーロの授業料を払う。親の経済状態によってはこれも免除される。「全ての子どもたちに全ての教育を与える」という信念が派遣制度の根底を支えている。「社会的責任として行っている。派遣は、所得の低い南エスポー地区から始めていった。」というパウラ校長の言葉を聞きながら、専門教育に携わる者が公教育、あるいは社会にどのようにコミットしていくべきか、大きな課題を突きつけられた思いがした。

## 4. 「音楽プレイスクール」の音楽実践

### 4.1 「音楽プレイスクール」の授業分析

この章では、「音楽プレイスクール」の授業を音楽エレメンツから構造分析し、教授方法と授業のストラテジーの解明を試みる。分析の対象とするのは、1) エスポー音楽学校の「音楽プレイスクール」から4歳児の授業、2) エスポー市: ヌオッタクンタ保育園の6歳児の授業、3) ヘルシンキ市の「音楽プレイスクール」から5歳児の授業で、いずれも現地で撮影した記録映像<sup>31</sup>を用いている。(なお、表中に記載された歌詞および教師と子どものやりとりのフィンランド語から日本語への翻訳は、通訳の川村パルムネン博子氏の全面的な協力を得た。)

音楽プレイスクールの授業には、年齢や実施場所が異なっても共通するいくつかの特徴がある。まず、45分～60分と活動時間が長いこと、間に休憩時間を入れないこと、集中力が持続するように、活動の中味がいくつかのセクションに分かれていること、一つ一つのセクションが「歌う」「リズムをとる」「動く(ダンスする)」「(楽器を)演奏する」「聴く」「即興」といった音楽のエレメンツに対応していること、である。

また、同じ歌が何度も登場するのも特徴で、異なる年齢のクラスで同じ歌を使用するだけでなく、異なる音楽活動(異なる音楽エレメンツ)で同じ歌を使用する例も見られた。

3つの授業の分析では、持続時間を縦軸にとり、音楽活動（エレメンツ）ごとにいくつかのセクションに区切った。（ ）に入っていない持続時間は音楽活動が続いている時間、（ ）内の持続時間は音楽活動以外の時間、例えば教師が子どもに話しかけている時間などを示す。各セクションの音楽活動の内容を太字で示し、また各セクションで用いられた旋律のフレーズやリズムパターンの譜例は備考欄に記した。これにより、各セクションの持続時間、全体の流れ、それぞれの授業のテーマ（ねらい）、どのような音楽スキルに重点を置いているかが明らかになる。3つの実践を比較しながら、音楽教師が子どもにどのように働きかけ、活動の充実を図っているかを考察する。

1) エスポー音楽学校: 音楽プレースクール <4歳児> 2015. 3. 9

表3 エスポー音楽学校: 音楽プレースクール <4歳児> (2015. 3. 9. 講師 Salla Hämeenaho)

持続時間	各セクションの音楽的内容	備考(曲名, 譜例など)
(2' 53") 11' 13"	導入 挨拶の歌 (一人一人の名前を歌に当てはめながら), 教師によるカンテレの伴奏, 全員の手拍子, 弱音で, 手拍子と足, など様々なヴァリエーション	① 
(2' 05") 3' 14"	フロアに広がる。CDの音楽を聴きながら全身運動 (特に曲のテンポやリズムに合わせることはない) 「(大意) 自転車のすてきなところは, 速いこと。平らな道も坂を下るのも気持ちがいい。」→椅子にもどる	カントリー音楽風のサウンド, ヴァイオリン
(3' 31") 5' 05"	(ホワイトボードにムーミンの家のイラストを描く。絵本を開いてムーミンの家族について子どもたちとやりとり) →「ムーミンパパ」を題材にした歌を唱えながら, マラカスを配布 → 器楽 「ムーミンパパ」の歌に合わせて, マラカスの合奏, ピアノ伴奏も入る (楽器を回収, フロアに広がる)	② 
5' 45"	車座になって大きな紐輪を皆でもつ歌を歌いながら, 運動遊び (船を漕ぐ動作) 「(大意) 波が岸に押し寄せてきた, 大波, 小波」歌に合わせてシンクロしながら動く	③ 
4' 10"	立ち上がって, 列になる →CD「シルクアピナ (シルクのサル)」の歌に合わせて, 運動遊び・ジェスチャー遊び 1回目: 行進, 2回目: スキップ, 3回目: 足を上げてバタバタ, 4回目: 眠る動作	Silkkiapina (by Soili Perkiö) マリンバ, ゴング使用。リズム的にもアフリカ, アジアの民族音楽を意識したサウンド作りになっている
(1' 40") 2' 41"	(フロアに布が敷かれ, 子どもたち, 寝転がる) 音楽を聴く・クールダウンの意味もある 子守唄「(大意) メールト (海のお化け) が透き通った水の下を搔く, 砂を搔き寄せ, 波と砂を搔き寄せている…」 教師がシャボン玉を飛ばし, 子どもたちは起き上がって追いかける (シートを片付けて, 椅子にもどる)	Meren aave (by Soili Perkiö) ピアノ, ストリングスを使用。
1' 40"	エンディング 「帰りの挨拶の歌」 ピアノ伴奏でも何回か繰り返して締めくくる	④ 



クラス編成は、男子5名、女子6名の計11名。指導者のサラは透明感のある美しい声の持ち主でピアノ演奏も巧みである。

活動の流れは、一人一人の子どもに話しかける挨拶の歌、音楽を聴きながらの全身運動（歩く、走る：音楽とシンクロしない）、楽器演奏（マラカス）、歌とシンクロする運動遊び、ジェスチャー遊び（最も活発になる時間）、音楽を聴く（クールダウン）、帰りの挨拶の歌、の7つのセクションに分かれる。各セクションは最初と最後の挨拶を除いて、ほぼ3～5分の持続時間で切り替わっていく。この授業のポイントは、CDで様々な音色のサウンドを聴かせていたことである。ヴァイオリンをアレンジしたカントリー風のサウンド、マイナー（短調）の曲調、マリンバと銅鑼による民族音楽風のリズムフレーズ、ピアノとストリングスによる子守歌など、非常に多彩である。フィンランドの教育現場は一般的にポップス音楽に非常に寛容だが、音楽プレイスchoolの授業も例外ではない。

## 2) エスポー市: ヌオッタクンタ保育園 <6歳児> 2015. 3. 10

表4 エスポー市: ヌオッタクンタ保育園 <6歳児> (2015. 3. 10. 講師 Inka Hämeenaho-Vaara)

持続時間	各セクションの音楽的内容	備考(曲名, 譜例など)
1' 22"	導入 LaLaLa で範唱→模唱	⑤ 
2' 30"	リズム打ち (手拍子と足踏み)「(大意) 火曜日のプレイスchoolに集まって皆で歌いましょう, モイモイモイ (「ようこそ」を意味するスラング), 1, 2, 1, 2,」	⑥ 
3' 40"	(子どもたちとの言葉のやりとり)「外は太陽が照っているので遠足に行きましょう」→ CDの音楽に合わせて運動遊び・ジェスチャー遊び	CD: Pieni iloinen tie (by Soili Perkiö)
(4' 05") 3' 25"	(子どもたちとの言葉のやりとり)「…船の上は揺れるから座って皆で身体を揺らそう」→CDのワルツに合わせて身体を揺らす, 立ってペアを組んでダンス	CD: Merenhuiske (by Soili Perkiö)
(3' 40") 3' 20"	(子どもたちと言葉のやりとり)「海には魚の他に何がいる? イカ, タツノオトシゴ, クジラ…」→ CDの音楽に合わせて運動遊び・ジェスチャー遊び	CD: Taskurapu (by Soili Perkiö)
2' 30" 1' 28"	リズム打ち (手拍子) (Ti と Ta: コターイ式リズム表示を用いて) 次の曲のリズムパターンを歌詞付き手拍子で	⑦ 
4' 00"	(子どもたちと言葉のやりとり)「島に着いた, 暑いね, ジャングルにいるのは誰? シルクアピナね。」 CDの音楽に合わせて運動遊び・ジェスチャー遊び	CD: Silkkiapina (by Soili Perkiö)
(3' 10") 3' 35"	(子どもたちと言葉のやりとり)「(先頭の子に) アピナになったつもりで, 皆がまねできるよう, 工夫してね」→ CDのサウンドに合わせ, 即興的なリズム運動表現・音楽ゲーム (列の先頭の子どもの運動を皆で模倣。先頭は次々交替していく。スキップ, 回転, 這うなど様々な運動が出てくるが, ルールがわからない子どもたちもいた)	CD: Tauon paikka (Time for a Break)

5' 35"	器楽（椅子にもどる，スティックが配られる） スティックを打ち合わせてリズム範奏→模奏  （スティックを回収）	⑧  
2' 46"	エンディング 1) オルゴールトーンによるクールダウン 2) 終わりの挨拶の歌	「エリーゼのために」 ⑨ 

スオッタクンタ保育園では、1歳から7歳まで5クラス83名の子どもたちを20名の職員がケアしている。「音楽プレイスクール」の派遣制度には4、5年前から参加していて、子どもたちの変化を実感しているということだった。「ほとんどの子どもは歌が上手になり、リズムやダンスの動きも良くなった。特に6歳児（就学前教育）になると非常に能力が上がっているのがわかる。保育園のスタッフではできないのでありがたいと思っている」とその効果を高く評価していた<sup>32</sup>。保育士たちは、月曜日に音楽教師が行ったことを火曜日から金曜日にかけて繰り返すが、特に音楽活動の時間は設けていない。




フィンランドの一般的な保育士は、あまり音楽活動を得意としていないようである。音楽教師のインカは「この保育園の先生たちの声が低いので」、音楽活動をしているときはキー（調）を意識している、6歳になるとリズムを充分把握できる子もいるので、メロディーとリズムをしっかり体得させようとしている、即興に際しては勇気をもたせるようにしている、と話した。

授業の流れは、教師の範唱を模倣することから始まり、リズム打ち、歌詞に合わせたジェスチャー付き運動遊び、ダンス、歌詞に合わせたジェスチャー付き運動遊び、リズム打ち（コダーイ式リズム唱）、ジェスチャー付き運動遊び、即興的なリズム運動表現、楽器演奏＝リズム打ち、オルゴールトーンを聴く（クールダウン）、の10セクションから成り、かなり盛りだくさんの内容である。各セクションの持続時間も、2分、3分と短く、音楽活動以外の言葉のやりとりが多いのもこのクラスの特徴である。リズム唱とジェスチャーを伴う運動遊びが多いこと、ダンスや即興的な運動表現が挿入されることなど、6歳児ならではの発展的なプログラム構成と言えよう。

興味深かったのは、譜例⑥のような「数え歌」「唱え歌」がたくさんあることに、フィンランドの幼児教育関係者が（音楽関係者も含めて）ほとんど無自覚だったことである。意識されないだけで、フィンランドにもかなりの「わらべ歌」が存在するのではないだろうか。

### 3) ヘルシンキ市: 音楽プレイスクール <5歳児> 2014. 9. 22

表5 ヘルシンキ市: 音楽プレイスクール <5歳児> (2014. 9. 22. 講師 Silja Mustonen)

持続時間	各セクションの音楽的内容	備考（譜例など）
13' 00"	導入 子どもたち椅子に座る（半円形），教師は一人一人の子どもとフレーズを使ってやりとりしながら，全員のカンテレを調弦	⑩-1 
2' 07"	ホワイトボードにカンテレのイラストを書く フレーズから派生した旋律を歌う	⑩-2  ⑩-3 

5' 08"	<p>唱え言葉（言葉のリズムと共に、付点リズムや3連符が入る）</p> <p>楽器に親しむ</p> <p>カンテレの胴をノックしたり、弦をかき鳴らす</p>	<p>⑩</p>
10' 49"	<p>音楽を使って全身運動（広いスペースに移動）</p> <p>1) 「ゴー&amp;ストップ」の遊び。テンポを変えたり、付点リズムにしたり、様々な変化をつける。</p> <p>2) 円になって座り、大きな紐輪を使って全身運動</p> <p>3) 紐を左回りに送りつつ、唱え歌</p>	<p>⑫-1</p> <p>⑫-2</p> <p>⑫-3</p>
4' 20"	<p>カンテレの弾き歌い（簡単なアルペジオで伴奏しつつ）</p> <p>（カンテレをケースにしまう）</p>	
4' 25"	<p>階名唱とハンドサイン</p> <p>カンテレ伴奏で歌ったフレーズの階名唱とハンドサイン</p>	<p>⑬</p>
9' 03"	<p>器楽</p> <p>1) マレット配る</p> <p>2) オルフ楽器配る</p> <p>2つのフレーズパターンを叩く。教師が伴奏リズムを変えてアップテンポにする（マレットと楽器を回収）</p>	<p>⑭（伴奏型）</p>
5' 23"	<p>音楽ゲーム（広いスペースに移動）</p> <p>1) 全員輪になって座る。大きな布を皆でもち、それを網に見立てて、魚を放り上げるゲーム。遊び歌を皆で歌う。</p> <p>2) CDで遊び歌を流す（授業で使ってきた旋律とリズムの元になった曲であることが明らかになる。最後は静かな曲調になり、クールダウン）</p>	<p>⑮</p>
3' 54"	<p>エンディング</p> <p>手遊び</p>	

クラス編成は、男子5名、女子5名の10名である。教師のシルヤはコンセルヴァトワール出身で、ベテランの指導者である。ヘルシンキで見学した「音楽プレイスクール」の授業は、最も活動時間が長く60分間続いた。

全体の流れは、子どもたちのカンテレを調弦することから始まったが、一人一人とやりとりしながら歌うフレーズ（⑩-1）を、リズムで表現（⑩-2）したり、もう少し長い旋律（⑩-3）にしてみたり、一つの音素材を様々に変容させていった。この活動が15分も続いた後で、森の動物を主題にしたユーモラスな唱え言葉（言葉遊び）、言葉に合わせてカンテレをかき鳴らす、叩く活動を短くはさんで、広いスペースに移動。音楽に合わせた「ゴー&ストップ」のゲームや大きな紐輪を使った唱え歌のゲームが10分以上続いた。ここでは授業の最初に出てきたフレーズ（⑫-2）の他に、新しいフレーズ（⑫-3）が登場した。再びカンテレを取り上げて、歌いながら簡単なアルペジオを演奏した後、その歌の階名唱とハンドサインを行った（⑬）。さらにマレットとオルフ楽器が手渡されて、子どもたちが⑫-3や⑬のフレーズを演奏するのに合わせて、教師が細かいビート（⑭）を刻む。次第にアップテ

ンポになり、音楽の密度が濃くなっていく。この活動は10分近く続いた。最後に、再び広いスペースに移動して、全員が大きな布をもち、それを魚の網に見立てた遊び歌ゲームが始まった。子どもたちが乗ってきたところで、CDの曲が流れ、授業の最初から使ってきた旋律とリズムが、この歌(⑮)の一部であったことが分かるという構成になっていた。

この5歳児の授業は、非常に周到に計画されていた。ごくシンプルな旋律とリズムのパターンを様々な音楽表現を通して反復し、体験として深め、最後にCDで曲の全貌を聴く一連の流れが実にスムーズであった。また、長い活動時間と短い活動時間の組み合わせもバランスが良く、子どもたちが集中しているのがよく分かった。オルフ楽器による教師の伴奏リズムも効果的であるし、布を魚採りの網に見立てたゲームを最後にもってきて盛り上げる演出も良い。音楽が子どもたちの中にしっかりと浸透しているのは、レッスンの途中でカンテレをケースにしまいながら、子どもたちが自然に譜例⑫-3を口ずさんでいたことが物語っている。「音楽プレイスクール」の原則である「喜び」「易しいこと」「繰り返し」を全て兼ね備えた見事な実践であると言える。



写真1 カンテレ



写真2 エスポー音楽学校

#### 4.2 「音楽プレイスクール」の実践を振り返って

「音楽プレイスクール」の3つの実践を振り返って明らかになったことは、45~60分の授業の構成がほぼ同じであるということだ。簡単な歌唱、あるいはカンテレを用いた導入歌に始まって、手遊び、リズム打ち(ボディ・パーカッション)などを短く挿入しながら、音楽に合わせて、あるいは音楽を聴きながら全身を使った運動遊び、楽器の操作と進み、最後はクールダウンのための静かな音楽で締めくくる。これは、4歳児、5歳児、6歳児と年齢が上がっても変わらない。

また、同じ歌を異なる年齢クラスで使用する例も頻繁に見受けられた。しかし、それは単に同じ歌を反復するのではなく、年齢に応じてその表現が少しずつ洗練され、複雑になるように工夫されている。例えば、3歳児のクラスではアップテンポの単純なリズムに合わせて身体を動かしているだけだったが、5歳児になると、同じ音楽がスローテンポで流れ、拍を2分割するリズムやテンポの伸縮を感じながら身体を動かすというように、子どもの発達段階に応じて、音楽表現が螺旋的に進化するよう、計画されているのが見て取れた。

表6は、エスポー音楽学校が公表している「音楽プレイスクール」の年齢ごとの音楽活動の概要を表にしたものである。それぞれの実践は、こうした基本計画に基づきながら、教師が個々に組み立てていく。幼少期の音楽活動に携わる指導者には、子どもの発達に関する理論的知識や経験に加えて、



表6 「音楽プレイスクール」年齢別目標

年齢クラス	学習の概要と目標（教師・親の働きかけと子どもの音楽能力、音楽活動の概要）
1歳児（親が付き添う）	教師は両親を勇気づけなければならない。教師はたくさんの遊び方を教える。個性や気質に応じた様々なタイプの援助をする。柔軟であること。活動時間はきわめて短い。レッスンの構成は常に同じである。歌とリズムの繰り返しが重要。小さな歌とリズムは、話す能力や歌う能力の発達を促進するためのもの。音楽に合わせて大人と一緒に輪になったり、鎖になったりして、自由にたくさんの運動とダンスをする。膝に乗せて子どもとゲーム。身体に触れるゲーム（安心感をもたせる）。
2歳児（親が付き添う）	レッスンの構成は1歳児と同じ。音楽プレイスクールに早くからいる子どもは、両親がいなくても自己管理ができる。お馴染みの遊びが、子どもに独立して遊ぶことを促す。運動能力の発達。身体のバランスを保つようになる。順番を待てるようになる。言語の発達。1歳児より集中時間が長くなっている。形の感覚も発達している。拍に合わせてより正確に演奏する。音の方向もより正確に聞き取ることができる。グループで歌う。
3-4歳児	子どもがお馴染みのゲームで遊ぶようになるのを援助する。様々な方法で拍を体験させる。輪になったり、鎖になったり、自由に動く。歌とリズムのストックを作り、それを拡げる。運動と歌と演奏において即興する。運動は、まだサイクリ的なものではない。身体とリズム楽器について学ぶ。一緒に、あるいは一人で歌う。
5歳児	歌うこと、ゲームをすること、音楽を聴いたり、リズム楽器や旋律楽器を用いて創作すること。5弦のカンテレを演奏し始める。親しんでいる歌や耳で覚えた旋律の伴奏をしたり、自分で歌を創ったり、即興したりする。安定した拍、旋律のあるリズム、シンプルなリズムパターンを伴う歌を学ぶ。リズムの記号について学習する。ソルフェージュの記号を使って歌う。5歳児はより社会的になり、人と一緒に何かをすることを楽しむ。運動能力とボディバランスが発達している。目と手の協応が発達し、より流暢な演奏が可能になる。小さな曲を様々なレベルで反復する。一人、あるいは皆で歌う。
6歳児	運動の基礎は充分発達しているが、多くの訓練が必要である。引き続き、5弦のカンテレを演奏する。親しんでいる歌や聞き覚えの旋律の伴奏をする。楽譜を使って、親しんだ曲を演奏することを学ぶ。長調・短調のコード記号を用いて、歌を伴奏することを学ぶ。即興する。少しずつ五線譜を読むようにする。以前に習ったリズムや旋律を復習する。基本的な拍子を安定して維持できるようにする。学び始めることが可能な楽器から学習する。

（‘Early Childhood Music Education in Espoo Music Institute, Finland’ 2013をもとに永岡が作成）

歌唱・楽器演奏・運動を統合するパフォーマンスの力や、即興表現などの創造性が求められる。こうした人材をどのように育て、現場に活かす制度を作っていくか、エスポー市の事例は、日本の保育者養成や教育・保育の現場にも様々な示唆を与えてくれるものと思われる。

## 5. おわりに: フィンランドの幼児音楽教育が示唆するもの

本稿では、フィンランドの幼児期の音楽教育について、ナショナル・カリキュラムの検討、専門教育機関と公教育の連携の事例、音楽プレイスクールの授業分析などを通して、その実像の一端を捉えようとしてきた。入手した情報が少ないので断定するレベルにはないが、現時点での知見を以下に纏めておく。

- 1) 子どもたちをどのような社会の一員として育てていくか、常に社会的合意が必要であるというのが、フィンランドの教育の基本姿勢である。教育の社会的責任や使命感は、ナショナル・カリキュラムだけでなく、現場の教育関係者にも貫かれている。

- 2) 幼児教育に関わるナショナル・カリキュラムの中で、音楽を含む芸術体験・活動は中心的なコンテンツの一つとして明確に位置づけられている。一つは、人間の基本的な行動の一つであり、子どもたちに「自己表現」の手段を与えるものとしてであり、もう一つは、美的世界や文化遺産、つまり大人たちの既存の文化に子どもたちを誘うものとしてである。
- 3) フィンランドの音楽文化はその言語や地域的特殊性にも拘わらず、歴史的経緯によってヨーロッパ文化に属している。したがって日本人のように伝統音楽と西洋芸術音楽との間のギャップは感じていないようであった。わらべ歌についても、幼児教育関係者や音楽教育関係者はその存在をほとんど意識していない。しかし、実際には数え歌や唱え歌など、一定数のわらべ歌が存在すると予想される。これは今後の調査が必要である。
- 4) フィンランドでも一般の保育士や幼児教諭は音楽活動をそれほど得意としているわけではない。それゆえ、幼児期にこそ「子どもたちに音楽への愛情を心の中に落とし込む」チャンスがあるとすれば、美的な世界・文化へと子どもを誘うサポート役として専門家が現場に関わる意義は大きいように思われる。エスポー市の音楽教師の派遣制度は、専門教育と公教育が連携するモデルケースとして興味深い。
- 5) 幼児を対象とした「音楽プレイスクール」の授業は、子どもの発達過程に配慮した体系的なカリキュラムに基づいている。日本で行われているより長い時間の集中力を子どもたちに求めているが、様々な工夫によって、活動が魅力的なものとなるように計画されている。しかし、実際には、教師がたくさん歌っているのに、子どもたちはあまり歌っていない場面も見られた。「音楽プレイスクール」の授業は、どちらかと言えば、子どもたちへのインプット＝情報の提供は多いが、子どもからのアウトプット＝産出は少ない活動である。だが、その点については子どもの反応をあまり気にせず、教師から見て重要と思われることを提供することに意義を見出しているのではないだろうか。いずれにしても、まずはたくさんの音楽を経験することが、自己表現に繋がる最初の階梯なのである。

\* 本研究は、科学研究費: 基盤研究 (C) 26381225 (代表: 尾見敦子) の助成を受けて行われた。

\* 本研究の調査にご協力いただいた全ての方々と機関にこの場を借りて深く感謝いたします。

## 注

- 1 現行の『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』『幼保連携型認定子ども園教育・保育要領』における「音楽」への言及の少なさに加えて、文科省の有識者会議による『幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について(報告)』(平成22年)の「幼児期の終わりまでに育ってほしい幼児の具体的な姿(参考例)」の中にも「音楽」への言及はない。また、小学校以上の「音楽科」に関しては、平成期の学習指導要領改訂の度に時間数の削減と他教科との融合が話題に上っている。
- 2 『幼保連携型認定子ども園教育・保育要領』(平成26年4月30日告示)「第1章総則」より。
- 3 尾見敦子氏(川村学園女子大学教授)、小川昌文氏(横浜国立大学教授)。
- 4 幼児教育は「遊び」を中心とするという趣旨から言えば、「音楽プレイスクール」より「音楽遊び学校」と訳した方が実態を伝えるように思われるが、現地の音楽関係者が Music playschool という言葉を使っているので、本稿では前者の訳を採用している。
- 5 フィンランド教育文化省のHPには『フィンランド教育概要』の日本語版も用意されている。
- 6 国、地方、学校の3種のカリキュラムの関係、及び基礎教育の音楽科に関するナショナル・カリキュラムと

- 地方カリキュラムの内容比較については、以下の文献を参照されたい。阿波祐子「フィンランドの義務教育における音楽科カリキュラム」『音楽教育実践ジャーナル』vol. 11 no. 2, 日本音楽教育学会, 2014. pp. 142-153.
- 7 フィンランドには、幼稚園と保育園のような区別がないので、本稿では「保育園」という名称で統一したが、実際にはECECという言葉が示すとおり、教育と保育の機能を併せもつ機関である。
  - 8 高橋睦子「子育て支援と家庭の変容」『安心・平等・社会の育み フィンランドの子育てと保育』明石書店, 2007年。p. 157. 参照。
  - 9 前掲書, p. 165, 168. 参照。
  - 10 筆者が見学したエスポー市の公立保育園では、年長のクラスを半分に分けて、一方が外遊びをしている間、もう一方の子どもたちが課題をしていた。課題はドリルやクイズのようなもので、学習というより遊びの要素が強い。担当教師の説明では、机に向かっての課題の他に音楽やディスカッションなども行うということだった。
  - 11 日本ではECECに関わる教師の統一名称がない。(保育教諭という呼称が候補に上がっている。)[「幼稚園教諭」という呼称は幼稚園に勤務する教師のみを意味するので、ここではあえて「幼児教諭」と訳した。
  - 12 フィンランドの高等教育については、表2を参照されたい。フィンランドでは1970年代に教員養成を大学universityで行うようになり、1978年に教師の資格として修士号を義務づけた。これは教師の社会的地位を上げ、優秀な人材を集めることが目的であった。幼児教諭(修士)の養成が始まったのは、1995年からである。
  - 13 本稿では、英訳版STAKES, 'National Curriculum Guidelines on Early Childhood Education and Care in Finland' (2003)を参照した。引用文の頁数データも全てこの英訳版に基づいている。
  - 14 Ibid., p. 9. 参照。
  - 15 Ibid., p. 19.
  - 16 本稿では、英訳版Finnish National Board of Education, 'National Core Curriculum for Pre-primary Education 2010'を参照した。引用文のデータも全てこの英訳版に基づいている。
  - 17 Ibid., p. 6.
  - 18 Ibid., p. 10.
  - 19 注13, p. 22.
  - 20 Ibid., p. 26.
  - 21 Ibid., pp. 14-15.
  - 22 Ibid., p. 20. 参照。
  - 23 19世紀末から20世紀にかけて、フィンランドの民俗音楽研究が優れた研究成果を上げていたことは、イルマリ・クローンの旋律分類法がハンガリーのバルトークに影響を与えたことから明らかである。ただ、現在のフィンランドでは民俗音楽研究と学校音楽教育の間に特に密接な関連はないようだ。この辺りの事情についてはまだ十分調査できていない。
  - 24 「音楽小学校」とは、正規の小学校カリキュラムの他に、音楽の授業を重点的に行う学校のことである。筆者が見学した東ヘルシンキ音楽学校併設小学校では、小学校と音楽学校が連携して、1年生からソルフェージュ(読譜)や器楽のレッスンを行っている。
  - 25 カンテレは、3000年の歴史をもつフィンランドの伝統的なツィター属の楽器である。学校などで演奏されている5弦タイプ(写真1参照)が最もポピュラーだが、音楽学校では、もっと弦の数も多く、移調も可能な大型のカンテレのレッスンを受けることができる。
  - 26 音楽学校と音楽プレイスクールに関する情報は、2015年3月9日に行われたエスポー音楽学校長Paula Jordan氏へのインタビュー、及び、Jordan, Paula, 'Music Education in Finland' 2014. 10. China. とPiispanen, Ulla, 'Early Childhood Music Education in Espoo Music Institute, Finland', 2013. 10. 26. EMO. の資料に基づいている。
  - 27 以前は、美術学校や音楽学校にもかなりの公的資金が出ていたが、最近は予算削減で親が資金集めをしなけ

ればいけなくなっている。私立のエスポー音楽学校の年間予算は約 400 万ユーロで、政府から 53%、エスポー市から 26%、生徒の月謝から 20% が捻出されている。

28 Paula Jordan 氏へのインタビューから。

29 タピオラとは、森林を切り開いて、公共施設や工場、集合住宅を立て、一つの都市機能をもたせるように人工的に造られた地域のことである。第 2 次世界大戦前から始められ、建物の色や高さ、屋根の勾配まで決められた都市計画として、世界中の建築家の関心を集めた。「タピオラ」という呼称は、民族の叙事詩「カレワラ」に登場する「タピオ（森の神殿）」が語源である。エスポー音楽学校も、このタピオラの文化センターの中に在る。

30 Paula Jordan 氏へのインタビューから。

31 子どもたちの映像を公開しないという条件で撮影を許可されたので、写真資料は添付しない。

32 副園長の談話から。2015. 3. 10.

## 文 献

- ・阿波祐子「フィンランドの義務教育における音楽科カリキュラム」、『音楽教育実践ジャーナル』日本音楽教育学会, vol. 11 no. 2, 2014. pp. 142-153.
- ・尾見敦子「諸外国に見る音楽教育における「幼小接続」ーフィンランドとハンガリーの事例からー」『川村学園女子大学研究紀要』第 26 巻第 2 号, 2015. pp. 43-62.
- ・尾見敦子, 小川昌文, 永岡都「音楽教育における「幼小接続」をどう考えるーアメリカ・フィンランド・ハンガリーの現状比較からー」『音楽教育学』第 44 巻第 2 号, 2014. pp. 80-84.
- ・庄井良信, 中嶋博『フィンランドに学ぶ教育と学力』明石書店, 2005.
- ・藤井ニエメラみどり, 高橋睦子『安心・平等・社会の育み フィンランドの子育てと保育』明石書店, 2007.
- ・『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』（平成 26 年 4 月 30 日告示）

## その他の資料

- ・Jordan, Paula, 'Music Education in Finland, Building Inner Motivation Music as a Social Tool', 2014. October.
- ・Piispanen, Ulla, 'Early Childhood Music Education in Espoo Music Institute, Finland', Espoo Music Institute, 2013. 10. 26.
- ・『フィンランド教育概要』  
[http://www.oph.fi/download/151277\\_education\\_in\\_finland\\_japanese\\_2013.pdf](http://www.oph.fi/download/151277_education_in_finland_japanese_2013.pdf) (2014. 6. 20 取得)
- ・'National Curriculum Guidelines on Early Childhood Education and Care in Finland' 2003.  
<https://www.julkari.fi/bitstream/handle/10024/75535/267671cb-0ec0-4039-b97b-7ac6ce6b9c10.pdf?sequence=1> (2014. 6. 20 取得)
- ・'National Core Curriculum for Pre-primary Education 2010'.  
[http://www.oph.fi/download/153504\\_national\\_core\\_curriculum\\_for\\_pre-primary\\_education\\_2010.pdf](http://www.oph.fi/download/153504_national_core_curriculum_for_pre-primary_education_2010.pdf) (2014. 6. 20 取得)

## 音 源

- ・Hannele Huovi, Soili Perkiö, Riina ja Sami Kaarla, 'Muumiperheen, lauluretki', Tammi, ISBN 978-951-31-7112-4.
- ・Liikuntamusiikkia, 'Limusiini, Let's move to the music!', Helsingin Konservatorio, Teosto 2003.

(ながおか みやこ 初等教育学科)